

北磾と物初の著作に関する書誌的考察

椎名宏雄

一、問題点

中国の禅宗史の上で、南宋期における臨濟宗の巨匠、大慧宗杲（一〇八九—一一六三）の門下を、大慧派とよぶ。門下生たちによつて、大慧を派祖とする意識がいつごろから闡明となつたのかについては、かららずしも明確ではないが、大慧とならんで、圓悟克勤の高足であつた虎丘紹隆門下の系統が、虎丘派とよばれる時期と無縁ではあるまい。

ともあれ、北宋から南宋初期にかけて全盛をほこつた雲門宗と臨濟宗黃龍派にかわり、南宋初期以後に禅門の主流的立場を占め、空前の隆盛をとげたのが、虎丘派と大慧派であつた。なるほど、わが中世以降、日本へと伝來した禅の四六伝中、虎丘派の三六伝に対して、大慧派はわずか三伝にすぎない。しかし、これは伝來の趨勢が、すでに後者の衰退してい

る南宋末から元初にかけてであつたからであり、⁽²⁾ 伝來の時期がもう半世紀早かつたならば、その数はもっと接近していたはずである。それほど、南宋初期の大慧派は、大きな勢力をもつていたのである。

たしかに、この時期にみられる大慧派の隆昌発展は、めざましいものがあつた。大慧その人の五山在住や、多くの士大夫たちとの交流にみられる中央接近の傾向は、その門下たちにとつても一層顯著となつてゐる。すなわち、五山十刹への勅住者を輩出し、王侯や高官との接近親交、それに伴うおびただしい奏疏詩文の作成など、当代の国家仏教的な色彩に、この派は、はなやかな彩りを添えたのである。当然ながら、多くの語録・公案・詩文などが撰述され、陸續として板木に彫られ、さかんに江湖に行われた。それは、質量ともにすごい豊かであり、さながら江南の春爛漫を思わしめる感があった。

じじつ、この派の人々による著作には、禅門の典籍史上か

らも、重要なものが少くない。大慧の『語録』や『正法眼藏』は別格としても、晦翁悟明の『聯燈会要』三〇巻、慧明の『五燈会元』二〇巻、晦巖智昭の『人天眼目』三巻などは、それぞれ、公案・灯史・綱要の分野において、宋代の禅を総合しようとした作品類であった。元代に下つても、なお東陽徳輝の『勅修百丈清規』一〇巻、梅屋念常の『仏祖歴代通載』二二巻、覚岸宝洲の『釈氏稽古略』四巻などは、やはり清規や仏教史の総括であった。従来はあまり注意されていなが、大慧派の占めた禪界の重鎮としての地位や、五山の権威などが相まって、こうした傾向をもつ著作の誕生を可能にしたのである。

ところが、大慧派の著作類には重要なものが多いにもかかわらず、一般の傾向としては、こんにち閲覧じたいが容易でないテキストの、あまりにも多いのに驚くのである。試みに、現在、大慧派の著作で最近まで稀書となっていた宋代の成立書をひろつてみよう。

まず、大慧の法嗣である橘洲宝曇の『橘洲文集』一〇巻、大慧下三世に当る北畠居簡の『外集』一巻、『文集』一〇巻、『詩集』九巻、同じく卒庵梵琮の『外集』一巻、北畠の法嗣である物初大觀の『贋語』二五巻、大慧下四世に当る藏叟善珍の『摘要』二巻、無文道璨の『無文印』二〇巻、淮海元肇の『外集』一巻、『掣音』一巻、同じく大慧下三世にあたる如

々居士顏丙の『語録』一五巻、『三教大全語録』二巻、などである。

これらのテキストには、ひとつ傾向があることに気づく。それは、詩文の類が多いことであり、特に文の中には、各種の記・銘・序・跋・伝・疏などを満載するものが多く、したがつて、南宋禪林の研究に不可欠の資料集となつてているのである。ところが、いざれもいわゆるの蔵外文献であるから、単行された古版や古写本が特定の機関に所蔵されるにすぎない。したがつて、こんにちなお一般研究者の容易に利用しうる状態ではない。

いま、こうした状態が生じた理由について考えると、二点をあげることができよう。一には、これらの著作の多くは文集・詩集・偈頌の類であるから、上堂・小参・普説などを中心とする語録類とは性格を異にし、いわゆる歴代の大藏經編集者の関心とはなりえなかつた点である。二には、大慧派は元代以降は急激に衰微し、近代まで存続しなかつたことがあげられよう。わが国に伝えられた系統をみても、拙庵徳光を承ける日本達磨宗は中世に断法となり、また、中巖円月の一根枝も近世には法嗣を断つてゐる。⁽³⁾ 従来、大慧派の動静があり研究の対象とならなかつたのは、このような、文献上と法系上の理由が大きかつたものと思われる。

しかし、禪宗史の研究の上からは、後世にその法系が絶え

るという現象をもつて、過去に大きな勢力があつた史実を、いたずらに過少評価したり、伝存資料に対する価値判断の基準とするならば、それは学問的配慮を欠くものである。たとえば、唐末以降の南宗禪興隆にともなつて、唐代に栄えた北宗禪の文献がほとんど抹殺されて伝来しなかつたのが、こんにちでは、敦煌出土文献によつて、その歴史と価値が再評価されている例もある。

ましてや、大慧派の場合は、伝来する文献資料が質量ともにすぐれていること、さきにのべたとおりである。のみならず、本邦中世の五山禪林に及ぼした影響は、決して少なくない。一例をあげると、虎闘師練の編する『禪儀外文集』二巻のごときは、宋代の疏・榜・祭文などを編集して五山禪林の文章規範とした書であり、のちに何度も刊行を重ね、臨濟宗七書の一として重用され、その末疏も多くつくられるほど流行している。ところが、原文の撰者をみると、橘洲・北磯・物初・藏叟・淮海・無文等、大慧派の人々の作品が大半を占めているのである。また、これらの人々のうち、淮海と無文をのぞいた他の祖師たちの著作は、五山で刊行されている。このように、五山禪林の芸術的方面に、大慧派は大きな影を落しているのである。

大慧派の作品に注目すべきこと、以上のべたとおりである。とりわけ重要なのは、この派の中心的な系譜につらなる人々

の著作である。それは、大慧宗果—拙庵德光—北磯居簡—物初大觀—晦機元熙—笑隱大訴、と次第する祖師であることに異論はないであろう。いま、北磯と物初の著作類をとりあげる理由は、彼等の作品類がもつとも多種かつ浩瀚であり、したがつて、現存する複雑な各テキスト類に対して、まだ総合的な理解がなされていないからである。

筆者は、両者の著作類の主要な古版調査にもとづいて、これら各典籍個々の成立や古版類の原初形態、各テキスト間の系統や関係などをさぐり、もつて総合的な文献整理を意図するものである。⁽⁴⁾こうした文献研究は、貴重な資料性をもつ両者の著作が今後大いに利用され活用されて、斯方面の研究を進展増大させるための、基礎的な作業の一助となればさいわいである。

二、北磯・物初の略伝と『全集』

北磯居簡（一一六四—一二四六）と物初大觀（一一〇一—一二六八）は、大慧派の重鎮であった。このすぐれた師資の著作は厖大であり、北磯は『語錄』一巻、『外集』一巻、『文集』一〇巻、『詩集』九巻をのこし、物初は『語錄』一巻、『贋語』二五巻をあらわしている。両者の語錄は正統藏經に収録されているが、他はほとんど稀観のテキストとなつていて。

両者の著作とみるに先だつて、まずそれぞれの伝記を略述

しておこう。北磯の伝は、物初が師の示寂後六年目にあたる淳祐一年（一二五二）に撰述した『行状』にくわしく、物初の伝は、その法嗣である晦機元熙が元の延祐二年（一二九五）に撰した『鄆峰西菴塔銘⁽⁶⁾』が基礎資料である。

北磯は、字を敬叟という。潼川（四川省）の人。二歳で出家し、後に徑山（浙江省）に登つて、別峰道印・塗毒智策などの尊宿に参じた。一日、卍菴道顔（大慧の法嗣）の語句によつて省悟の体験をし、四明育王山（浙江省）の拙庵徳光に参じて印可を受けた。こののち各地の叢林を往来すること一五年あまり、この間に、覓円用・無象覚・性空智觀・鉄牛印・空叟宗印などの禪侶と交流し、西山洪・清叟淵・朴翁義鈎・聖予空などから畏敬をうけた。やがて江西に行き、各所に祖蹟をたずね、仲温曉瑩（『羅湖野錄』の撰者）と交わり、大慧から伝わった竹箆を受けた。また、閩（福建省）の雪嶠に鉄菴一をたずねて参じた後、四明に帰り、師の拙庵が退席した育王山の記室を務めた。さらに、靈隱寺（杭州）の松源崇岳と息庵達観に参じて、掌記の役に任じた。

嘉泰三年（一二〇三）、台州（浙江省）の般若禪院に出世し、

州の報恩光孝禪寺に移つた後、靈隱寺の首座に任じた。このころ、錢德載とともに鴈蕩山に遊び、葉適に重んじられた。

そののち、廬山の東林寺住持に招かれたが辞去し、もっぱら靈隱寺飛来峰の北磯に居住し、悠然として自怡すること一〇

年であったため、北磯と号するようになった。その後は二〇年間にわたつて、湖州（浙江省）の鐵仏觀音寺、同西余の大覺寺、安吉州（浙江省）の圓覺寺、寧國（江蘇省）の彰教寺、常州（同）の顯度寺、同碧雲崇明寺、蘇州（同）常熟の慧日寺、道場山（同）護聖万歲院、淨慈山（杭州）報恩孝光禪寺を歴住し、靈隱寺にも請められたが、癡絕道冲を推挙した。淳祐六年（一二四六）四月一日、遺偈をのこして示寂した。世寿八三歳であつた。生涯の度僧はすこぶる多く、法嗣もまた少なくない。

このように、北磯は四川省の出身でありながら、郷里に住持することはなく、もっぱら浙江・江蘇の禪刹一一ヶ寺を歴住している。出世以前の経歴をみても、ほとんど五山十刹の近辺が主であつて、道俗高官たちとの交流関係もまた、はなやかであつた。したがつて、厖大な詩文の著作は、内容的に当然そうした色彩が濃いものである。北磯は、いわば詩僧としての文才と、宗師家としての力量とを兼備した禪匠ということことができよう。

北磯一代の著作などについては、物初が『行状』の末尾で、つぎのようにのべている。この記述は重要な意味をもつてゐるので、意訳と原文とを併記しよう。

『語錄』と『外集』の各一巻がある。判府右司の劉朔齋公が序を付し、すでに鋸梓^{せばん}し、刊行するばかりだ。ほかに、『詩文』四

○卷は以前から世に行われている。「続集」一巻もある。大衆たちは、すでに先師の生前からの命を遵り、その遺体の全身を、月堂和尚の塔の右側に入塔した。謹しんで先師の事遺を次第ねたが、後人は考証をしていただきたい。

淳祐辛亥（一二五二）の季春、北山靈隱寺に客せて嗣法した小師の大観、謹しんで状べる。

有語録・外録各一巻、判府右司劉公朔斎為序、已鋟梓行。外詩文四十巻、已前行。続集一巻。衆既遵治命、塔全身于月堂之右。謹次第其事遺。後人有以考。

歲淳祐辛亥季春　客北山靈隱嗣法小師大観　謹狀

注意すべきは、北畠の「続集」も物初が撰した「行状」も、ともに宮内庁書陵部に所蔵される宋版の『北畠外集』に付録されているという事実である。つまり、物初は先師の『語録』と『外集』を編集し発刊する直前に、「続集」と「行状」とを付録したものであろう。右に、あえて「鋟梓し、刊行するばかりだ」と意訳したのは、そのためにほかならない。要するに、われわれは、物初がこの「行状」を書いた淳祐一一年（一二五二）の時点で、北畠の撰述のうち、『詩集』と『文集』の四〇巻は北畠の生前に刊行され、『語録』と『外集』は刊行直前、という状況を確認しておきたい。ちなみに、『語録』『外集』『続集』『行状』の四書はすべて物初の編集であり、

先師北畠の著述と伝記の敷衍伝存につくした物初の功績は、はなはだ大きいことを知るべきである。

物初大観は、四明（浙江）鄞県の出身である。道場山（江蘇）の北海悟心について出家し、具足戒を受けた。のちに育王山の無準師範に参じ、さらに淨慈寺の石田法薰に参侍して、掌記の役職に任じた。たまたま、淨慈寺に来た北畠居簡に師侍の礼をとり、日常の疑帶を永解した。その後、北畠に随侍して道場山や淨慈寺に赴き、やがて杭州の法相寺に出世した。以後は、安吉州（浙江）の顯慈寺、紹興府（同）象田の興教寺、慶元府（同）の智門寺、大慈山（同）の報恩寺に歴住し、景定四年（一二六三）、育王山広利寺に勅住して道譽をあげた。咸淳四年（一二六八）、同寺に寂し、六八歳の生涯をとじた。著述には、『臘語』六冊と『六会語』一冊がある、と晦機は『塔銘』でのべている。

このように、物初もまた禪刹を歴住しながら厖大な詩文を遺した点で、師の北畠と同傾向の人であつたといえよう。ただし、両者の著作を比較すると、物初の『臘語』は分量的には詩作が約 $1/3$ であつて、他は文から成っている。その文は、各種の記・序・跋・疏・祭文・碑銘・行状など、貴重な資料に富んでいることを特長としている。したがつて、物初は詩僧というよりは、文才のある禪匠といべきであろう。

ふたたび、北畠の著作にもどうう。まず、個々の典籍についての検討をするのに先だって、「北畠全集」なるものについて考察しておかなければならぬ。わが書誌学界の泰斗、川瀬一馬氏は、北畠の全著述は、わが五山の禅林で「北畠全集」の名で同時に刊行された、と主張されているのである。すなわち、労作『五山版の研究』上巻の漢籍解題之部で、つぎのような解題をほどこされている。(傍点は筆者の付加)

263 北畠全集(語録・外集・詩集・文集)

応安七年刊。宋敬叟居簡撰。語録(一巻)・外集(一巻)・詩集(九巻)・文集(十巻)。詩集の巻末に応安七年(甲寅)祖応の刊語がある。語録のみは若干版式書体が異つてゐるが、それは覆刻所拠の底本による相違であらう。全部共時に刊行されたことは間違ひないとと思ふ。そして、これらは大陸から來朝した刻工の手にかかるつてゐるが、彼等の所為としては最も雕版がよい刻本である。⁽⁸⁾

以下、語録以下の四書に対して、書誌的な解題がなされてゐる。いま、「北畠全集」という呼称だけを問題にすれば、ふしきなことに、右の解題があられる祖応の刊語の中にも、また、筆者が披見したいずれの五山版中にも、「北畠全集」という名称をみいだすことができないのである。のみならず、中国・日本の近代以前の語録にもみいだせぬこと、また同じ

である。

ただし、宮内庁書陵部には、「北畠全集」とする五冊本を現存する。しかし、これは後にもくわしく紹介するよう、『文集』と『詩集』の各零本による混成調査であつて、到底「全集」の名には価しないし、その名は近代の編集名にすぎない。また、川瀬氏が五山版の四書は全巻同時に刊行された、とする所言も問題である。その理由については、次項で詳述する。

とにかく、こうした問題点を解明するためにも、どうしても北畠の著作類は、古版を中心とする個々の文献調査にもとづく総合的な検討が必要である。ところが、それらの現存状況は、各機関に断片的に所在するものが多く、かなり複雑である。そこで、個々の典籍別に異版・異本類の所蔵状況を一覧できるように作成したのが次頁の表である。

三、北畠の『語録』と『外集』

北畠の『語録』と『外集』の各一巻が、ともに物初の編集であり、淳祐二年(一二五二)には刊行直前の状況にあつたことは、すでに述べた。内容的には、『語録』は北畠一一会における語句の集成であり、『外集』はそれにもれた偈頌・贊・題跋などを編集したものである。書誌的みると、これら二書は、宋版・五山版を通じて合刻されてきたことが、以

詩集 九卷	文集 一〇卷	外集 一卷	語録 一卷	
(神) (金) (成) (宮) 宮内庁書陵部 成篤堂文庫 金閣寺 神田喜一郎 (梅) (大) (内) 大東急記念文庫 両足院 (積) 梅沢彦太郎 (駒) (国) 国立国会図書館 横翠軒文庫旧蔵 (駒) (松) 松ヶ岡文庫 駒沢大学 (早) (岸) 東洋文庫 岸伝院岸沢文庫 早稲田大学	三冊 (成) 零一冊 (宮) 卷五之一六	零二冊 (宮) 卷七之一〇	一冊 (宮) 跋補写	宋版 前刊 五山版 刊 五山版 刊元禄 木活版 木活版 筆写本 校乾隆 四庫全書本 刊明治 正統藏本 一九八〇影印
		二冊 (大) (内) 混語録と	一冊 (梅) (内) 後半欠	五山版 前安三(一七〇〇)以 五山版 前安七(一七〇七)跋 木活版 宝水三(一七〇〇)刊 木活版 筆写本 四庫全書本 正統藏本 一九八〇影印
	四冊 (積) 零二冊 (内) (成) 三冊 (国) 混文集と	四冊 (内) (成) 零一冊 (東) 三冊 (國) (東) 混文集と	五冊 (内) (成) 四冊 (内) (成) 二冊 (早) 三冊 (國) (成) 二冊 (松) 四冊 (松)	五冊 (内) (成) 四冊 (内) (成) 二冊 (松) (成) 珍本二集 No. 三〇六一三 七
	四冊 (松)	四冊 (松)	二冊 (金)	二冊 (松) (岸) 一冊 (駒) 前半欠
	三冊 (駒)	五冊 (成)		
	No. 三〇六一三 七	珍本二集 No. 三〇六一三 七		
	初編五 卷一~四まで	初編五 卷一~一〇		

下の考察によつて知られる。

現在、この『語録』と『外集』の宋版をあわせて所蔵しているのが書陵部であり、きわめて貴重な所蔵例である。しかも、この二書には等しく「菓杏」の古朱印が捺され、ともに伝存されてきた年輪の大きさをものがたつてゐる。ただ、惜しむらくは、「菓杏」は不詳であり、伝來の事情を知ることができない。

これらの二書については、すでに『図書寮典籍解題』漢籍篇、第七仏書、の項で書誌的な解題がなされているが、若干の誤りもある。ここでは、重複しない範囲のことを記述し、また問題点を検討したい。

まず、書陵部本の宋版『語録』(一巻一冊)は、つぎのよう構成をとつてゐる。

- | | | | | | |
|-------------------------|--------------|-------------------------|-------------------------|-----------|-------|
| 1
劉震孫の題、淳祐一二年(一二五二)撰 | 2
秋房樓治の後題 | 3
靈隱心月の書、淳祐戊申(一二四八)撰 | 4
大川普濟の語、淳祐辛亥(一二五二)撰 | 5
語録本文 | 全4丁補写 |
|-------------------------|--------------|-------------------------|-------------------------|-----------|-------|

(1) 台州般若院以下常熟惠日寺までの九会の語録………
………31丁補写

(2) 道場山万歳院以下二会の語録……第32丁～72丁、宋版

(3) 仏事……前4丁は宋版、後半の第5丁～8丁補写

右のように、書陵部本は宋版とはいものの、前半と末尾は補写であり、宋版の原初部分は語録の中間以後の45丁にすぎない。また、本書には何の識語もなく、補写の事情なども不明である。したがつて、前付される四つの題記等は、半葉六行一二字に大書こそされてはいるが、いかなるテキストから補写であるかは、他本との対校を経なければ速断することができない。

いっぽう、同じ宋版『語録』とみなされる一本が、内閣文庫に所蔵される。このテキストは、『改訂内閣文庫漢籍分類目録』では元刊の『北磯詩集』九冊とされるものの、第九冊目の一冊である。まず、この九冊本全体の調冊を、つぎに示そう。

- | | |
|----------------------------------|---|
| 第一冊～第二冊
第三冊～第七冊
第八冊
第九冊 | 『詩集』九卷
『文集』一〇卷
『外集』「続集」一卷
『語録』一卷 |
|----------------------------------|---|

つまり、この内閣本九冊は、あたかも“北磯全集”的ような体裁を呈してゐる。ただし、この調冊形態は後代の編集であつて、決して宋版の原型でも五山版の体裁でもない。その編集の経緯は、第二冊目の『詩集』末尾に墨書きされる伯映泰の識語によつて、容易に知ることができる。これも書誌的に貴重な一文であるから、意訳と原文をあげておこう。

北畠禪師の著作は、『語錄』一巻、『文集』十巻、『詩集』九巻、『外集』『続集』それぞれ一巻、合計すると五部二十二巻が禅師一代の全編である。ところが、全部の書は世間に稀な存在となっている。私は、たまたま『文集』『外集』『続集』を入手し、これを閲覧してみると、わが国の上古時代の刊本であった。おそらく、これらは貞和（一三四五～一三五〇）から觀応（一三五〇～一三五一）年間のあいだに、京都の天竜寺や臨川寺などの禅刹寺院で、宋・元代の刊本を翻刻したものであろう。しかし、囊帙は湿氣で損耗され、巻を開き匹くなっているので、補修をほどこした。

次にまた、支那で刊行された『語錄』を入手した。しかし、これは破損や滅失の部分が特に多く、すでに序跋などのある首部と末尾を欠いていた。そこでまた修飾を加え、ほかの同類の本と比較して、その闕けた部分を補写した。

久しく『詩集』だけが欠本のまま、長らく年月を歴た。ところが、今歳はまた古本の『詩集』を感激して入手することができた。これで三度にわたり、五部二十二巻の全部を円備に周足えることができた。そこで歓喜して修補をほどこし、全九冊の調卷とし、これを一帙におさめ、書庫に収藏したのである。ああ、これは誠に因縁の不思議によつて、北畠禪師の全ての懷中を見ることができるのであろう。

皆に正徳辛卯（一七一一）仲夏の下浣

求法の沙門、伯映泰

北畠禪師、語錄乙巻、文集十巻、詩集九巻、外集・続集各一巻、合五部二十二巻、是一代之全編也。而全部本、希于世也。適得文集、并外・続集、開卷視之、扶桑上古之印板也。蓋是、貞和・觀応之間、於天竜・臨川等禅刹、以宋・元印本所翻刻者歟。囊濕損耗、匹展開卷、因修補焉。次復獲支那印刻之語錄、損滅殊多、已沒序跋等、前後紙亦加修飾、校于類本、補於其闕。久欠詩集、歷年月矣。今歲復感得古本詩集、三度五部二十二巻、円備周足。歎喜修補、調成九冊、收之一帙、留書藏焉。嗚呼、是誠因縁不思議、而見北畠禪師之全懷者乎。

正徳辛卯仲夏下浣

求法沙門伯映泰

伯映泰については不詳であるが、北畠の全著作をえて歓喜し、全九冊に調冊修補した労は多とすべきである。とまれ、いまは第九冊目の、大陸の古版とされる『語錄』に注目しよう。この古版には、たしかに右の識語のいうとおりの序跋が補写されるほか、本文巻頭の般若禪院語錄の首部一紙と、本文末尾の「仏事」八紙の全部も補写されている。しかし、古文版の現存部分は、書陵部の宋版よりもはるかに多い。

筆者は、書陵部の宋版残存部分の写真と、内閣本の該当部分を比較対照してみた。すると、版式・行格・版心はもとより、刻字体・匡郭・界線などを精密に検討した結果、両者は完全に一致し、同一版なる確証をえたのである。摺刷状態も

ほぼ同じであり、あるいは両者は同時期の摺刷本であるかも
しない。かくて、書陵部本が宋版であるならば、内閣本の
『語録』も元版ではなく、同じく宋版とすべきである。

他に宋版の所在は知られない。したがつて、書陵部本に補
写される前記四つの序跋について、内閣本の補写や五山版に
よつて、原版の状態をさぐつてみよう。まず、内閣本に補写
される序跋とは、巻首に劉震孫・靈隱心月・大川普濟の三
序、巻尾に秋房樓治とわが中巖円月による二跋である。秋房
樓治の文は「後題」とされるから、書陵部本が巻首におくの
に比較すれば、巻末におく内閣本の方が自然である。また、
さいごの中巖の跋は応安庚戌(一三七〇)の年記があることか
らも、五山版にもとづく補写である。

じつは、この内閣本に補写される中巖の跋には、破損では
ない不完全な文字八つがある。おそらくは、補写の原本が破
損なのであろう。ところがいっぽう、近代の正統藏経一一二
一一六一一に収録される『北磯語録』末尾の該当箇所は、ま
さしく内閣本と一致し、八文字を□としているではないか。
かくして、正統藏本の底本は、内閣本かまたはその基づいた
五山版であることが知られるのである。

北磯の陰おんい語は、日本ではまだ刊行されていない。私は、も
つたいなくも法系の曾孫であるから、その責任を負わせられよ
う。古巖西堂が募縁をして、北磯の『語録』と『外集』の二冊を開
版し、すでに京都で刊行している。私は大衆を集めてこれらの
書を読み、夸つてゐる。わが祖師の語句は、この胸のうちにある
ようなものだと。それはあたかも、夏の国の葛伯は先祖の祀りが
できなかつたのに、殷の国の成湯は民に餉かぞを送り田を耕やさせて
祀りをしたので、葛伯が放ほつてこれを食べたという故事に似てい
る。これに繇したがえば、私は北磯の書を読んで夸るとはいへ、類ひたいから
の汎まぜは當分、雨のふるようである。

応安庚戌(きんげい)(一三七〇)の夏、不肖な遠孫、円月拝手す。

磯陰語、日本未行。予忝為耳孫、責不帰焉耶。古岩西堂、募縁開
版、語録・外集二冊、既印行京師。予集衆読而夸之。吾祖如此胸
次也。有似葛伯、不能祀其先、成湯送餉於民使耕田為祀、葛伯放
而食之、繇是予雖讀而夸之。類汎且如雨下。

応安庚戌夏 不肖遠孫円月拝手

この跋文は、中巖の撰述である『中巖和尚語録』や『東海
一漚集』『東海一漚別集』『東海一漚余滴』などのどこにもみ
いだすことができない。⁽¹²⁾しかし、その文意からみて、応安三年の夏、古巖西堂の募縁によつて『語録』と『外集』が京都で合刻されたときの五山版に付された一文、とみることができよう。では、どこに付刻されていたのであらうか。

五山版の『語録』⁽¹³⁾は、さきに表示したように成簣堂文庫と両足院に所在し、同じく『外集』は内閣文庫・梅沢彦太郎氏の所蔵が知られ、また、両書の混合本が大東急文庫に所蔵される。筆者は、梅沢氏のもの以外はすべて閲覧しているが、どの五山版にも中巖の文は刻されていないのである。

では、五山版『語録』はどうなっているのだろうか。まず、成簣堂本は、巻頭に徳富蘇峰氏による明治三八年の識語、ついで劉震孫・秋房楼治・靈隱心月・大川普濟の四序跋、そして本文の順である。両足院本は、劉氏・秋房・心月の三序跋、本文の順で、大川の序を欠く。両本とも前記宋版と同じ版式・行格をもつ覆宋版であるが、尾題の位置などには若干の移動がみられるから、完全な覆刻版とはいえない。しかし、現存する宋版では補写でしかみられぬ宋代の序跋四点が、かえつて五山版では宋版に忠実な行書体と印記とを遺存する点で、文献的な価値はすこぶる大きい。

かくして、宋版本來の構成は、内閣本宋版が補写している体裁、すなわち

- 1 劉震孫の題 淳熙一二年（一一五二）
- 2 靈隱心月の書 “ 八年（一一四八）
- 3 大川普濟の語 “ 一年（一一五二）

4 語録本文

5 秋房樓治の後題

という順序であつたと推定される。これに対して、応安三年ごろ刊行の五山版は、5の後題を1と2の間にくり上げ、代つて末尾に中巖の跋をおくのが原型であつたと思われる。

さて、宋版の序跋者四名であるが、心月と普濟は、ともに北畠が永らく偶居した靈隱寺の歴住者であるから、序者としてふさわしい尊宿である。また、劉震孫は吳興の大守で右司の劉朔斎のことであり、かつて北畠を常熟の道場山に迎請した帰依者であつた。⁽¹⁴⁾さいごの秋房楼治は、秋房侍郎とされる高官であり、北畠よりも物初との親交があつた人である。⁽¹⁵⁾これら四序跋は、すでに卽続蔵本でみることはできるが、五山版とは若干の文字の相違があるので、以下、成簣堂本五山版を底本とし、続蔵本で対校しておこう。

北畠老師、人品甚高、造道甚深。其為文章、奇偉峭抜、甚似柳柳州。夫不逸於俗、固當在儒林丈人行、至若沈冥得喪之表、超脱死生之際、則文字語言、又特其遊戲三昧。彼以文譽之者固陋、以禪譽之者亦淺焉耳。非文非禪、妙不可伝而可觀。乃方掇拾糟粕、以為鉅編、得不貽定中一蹶然乎。雖然、道不可以言伝、而非言亦以求道。是編之出、於無学者、蓋不為無助也。余昔仮守苕霅、嘗以師表聞于朝、主道場法席、天子知其名、詔遷淨慈、卒老於斯焉。其兄壞菴居照、亦西州大尊宿、老大父清惠公、為方外交云。

淳祐十二年春二月既望 東北人劉震孫題

一脉能分妙喜泉、薰風一転代流伝、等間坐断南山頂、擊碎珊瑚也。

直錢。北礪禪師、以載道之文。嗚、于時方壯歲、已為善知識名、公卿友而畏之、或者捨其造詣、而声其文、豈深知吾北礪也耶。物初携室中語來、因題其後。秋房樓 治

*巳一巳

拙菴以拙為人、人所共用、唯北礪向巧拙不及處、指柳罵桑、喚龜作鰐。所謂正宗別調、直指曲說者、是此老人所供。當有與之翻疑者。淳祐戊申三月既望、法姪孫靈隱心月敬書

印 印

『外集』の宋版は、前述のように現存唯一一本が書陵部にある。本書についても、『図書寮典籍解題』の中に書誌的な解題がなされている。本書における左右双边、有界、一〇行二〇字の行格、装訂の大きさ、などの書誌的特徴は、すべて前記の宋版『語錄』のそれに等しく、両者の版刻上においての密接な関係を示している。

本書の構成は、つぎのとおりである。

1 物書大觀の序、淳祐庚戌（一二五〇）

印 印

2 本文（偈頌・贊・題跋）

3 行狀 淳祐辛亥（一二五一）、物初撰

4 中巖円月の跋（補写） 応安庚戌（一三七〇）

右の諸記事のうち、3の物初が撰述した北礪の「行狀」は『物初贋語』卷二四にも所収され、さきに北礪の略伝の資料として用いたものである。また、4の中巖の跋についても、すでに述べた。

注目すべきは、卷頭におかれる物初の序である。この一文はまだ活字にされていないので、書陵部本宋版を底本とし、『物初贋語』（古活字版）卷二二の所収本で対校し、その意訳文とともに示そう。

ところで、右の四文が書かれたのは、同時期ではない。卷首の劉氏による序は、つぎの心月のものより四年もおそい。これはなぜであろうか。じつは、これを解明するためには、『外集』の古版に関する考察を前提とするから、以下、『外集』に移らう。

大観は、昔、先師北礪に師事していた時、毎に火炉頭の親語を聴いていたが、先師は、大衆に対して時事間に、旧作の偈句を挙

揚げられていた。その多くは、先師が仏照禪師の会下と、雪峰の鉄菴師による法席の時に泊る作品であった。

ここに私は、先師が提唱した『語録』のほかに、これらの作品をえ、また、『語録』の中に載せないものは併び萃せて、『外録』とした。いったい、先師の言句に内外の別があるべきであろうか。その多くは、まだ出世されなかつた時の言句のみである。こ

れは、先師が仏照禪師と相見した処であるが、脱然と所得を忘れているので、その言句を見ると、あたかも珠が盤上を走るよう、宗趣を発揚し、後学者への砭警となつてゐる。

これより後、わたくしは先覚たちの手脚を、あたかも諸祖の墓塔を礼するように閲覧したが、なんと、東山法演門下の十人の父祖たちには、さながら家風を漁り賛語を倣しんでいたる類であり、叢林に伝わる所を挙揚するのに尤つてゐる。此の書物は、渾金か璞玉か、はたまた土苴の緒余か。具眼ある高流は、大家としての証拠を見せられよ。

淳祐庚戌（一二五〇）清明節後の十日、冷泉に客せて嗣法した小師の大観、謹しんで書す。

文中、北磬が贊を付した東山下の十父子とは、五祖法演の法嗣である開福・圓悟・仏鑑・南堂・仏眼の五名と、その五名の各法嗣である月庵・仏性・仏燈・石頭・老禪の五名を指す。北磬が、当時、自派のほかに特別の関心を寄せていた人々の禅風が特徴的に表現されている点、『外集』に収める「贊十父子」の資料性がある。

* 大観—某 * 語—話 * 席中—ナシ * 爾—耳 * 師—ナシ
* 贊—讚 * □—於 * 以下ノ年記ト署名ノ二〇字ナシ

玉、土苴緒余、具眼高流、大家証拠。
淳祐庚戌清明後十日

客冷泉嗣法小師 大観謹書

大観、昔侍先師、毎聴火炉頭語、在衆時事間、挙旧作偈句。多仏照祖会下、洎雪峯鉄菴席中時也。茲於提唱録外得之、又録中所不載者、併萃以為外録焉。夫、言豈有内外哉。以其多未出世時之言爾。惟先師於仏照祖相見處、脱然忘所得故、見於言句、如珠走盤、其發揚宗趣、砭警後学。自是前輩手脚如礼諸祖師塔、与夫東山下十父子、漁家傲贊之類、尤為叢林所所伝挙。見□此渾金璞

書陵部の宋版では、「偈頌」の全三六紙のうち、第二二紙表の第一行が空白であるのに対し、五山版はここに「北磬和尚統集、嗣法小師 大観 編」の一三字が刻されている相違についてである。この「統集」については、さきに引く「行状」の中では、一巻があると物初はのべてゐるが、右の序文中には闕説がない。これを考へるに、おそらく物初は、『外集』を版刻するに先だつて、その末尾に偈頌をおき、「統集」の偈頌とつながるように編集したのであろう。それを五山版が、あえて第二二紙の首に「統集」と明示するのは、その事実を熟知していた者の善意による補刻であつた。それは、覆

刻者が大慧派七世の中巣円月にして、はじめて可能であったと思われるのである。

ともあれ、以上、序跋の検討によつて、北畠の『語録』と『外集』は、宋版・五山版ともに同時期に合刻されたとみられる。物初は、はじめ『語録』を刊行しようとして、心月・普濟・秋房侍郎の序跋をえた。しかし、その版刻には慎重を期したらしい。直接の理由は不明であるが、『外集』の合刻を意図して自序を撰し、さらに「続集」と「行状」とをくわえて完璧をはかり、さいごに劉震孫の総序を『語録』の巻首において、ついに全巻合刻を成就したのであろう。序跋における年時の相違は、このような経緯をものがたるものとみられる。

宋版と五山版に、それぞれ重刊がなかたかどうかは不明である。しかし、現存するすべてのテキストや書目類などからは、そうした記録をみいだすことはできない。

ところで、二書の同時合刻という性格は、のちに欠本や欠丁が生じた場合、両書が混合しやすいという欠点をも内包する。五山版の混合である大東急本は、そうした実例である。該書は、大東急文庫では「北畠和尚語録・外集 応安七年刊二冊」として所蔵され、その解題で書誌的内容は知られる⁽¹⁷⁾から、ここでは現存状況だけを調査順に一覧しておこう。

△第一冊▽

1	物初の序	1丁	2	偈頌	7丁(1~7)
3	淨慈寺語録	38丁(35~72)	4	小参(小仏事)	
5	仏事	7丁(1~7、以下欠)	6	偈頌	18丁(8~25、以下欠)

△第一冊▽

7	贊	15丁(1~15)	8	題跋	6丁(1~6)
9	行状	3丁(1~3、以下欠)			

すなわち、大東急本の欠丁部分は、他の五山版と比較すると、『語録』は序跋と本文の前半34丁と「仏事」の最終丁、「外集」は「偈頌」の第26丁以下の11丁、「行状」の末尾1丁と中巣の跋、であることが知られる。

またいっぽう、駒沢大学図書館には『北畠和尚語録並外集』なる古写本一冊が所蔵される。しかし、内容的には、巻頭に物初の序をおきながら、以下、道場山方歳寺の語録本文から「仏事」の末までと、『外集』の本文最初から「小師祖約謂贊」までが連写される断欠本である。五山版と同一の書式であるから、断欠本の五山版にもとづく筆写と考えられる。さて、近世になつてから、元禄一六年(1703)に『外集』、宝永三年(1706)に『語録』が、それぞれ木活字の

二冊本として刊行されている。前者は金閣寺、後者は松ヶ岡文庫と岸沢文庫の各所蔵が知られているが、筆者は未見である。この木活字版の両書は、三年をへだてているから合刻ではないが、おそらくは五山の合刻本を底本とする重刊であつたと思われる。

近代の古続蔵中に、『語録』が収録されていて、おそらく五山版を底本とするとは、すでにのべた。これに対し、『外集』のほうは、こんにち依然として稀書となつていて、そのテキストを見るることは容易でないといううらみをのこしている。

四、北畠の『文集』と『詩集』

北畠は詩文に長じていたから、一一会の語録が『語録』『外集』各一巻であるのに対して、『文集』は一〇巻、『詩集』は九巻の多くを遺している。前者には五五〇点、後者には一〇〇〇点以上の、厖大な作品を收める。一般に、詩僧は文章に疎いのが普通であるが、北畠には豊富な『文集』が存するため、あたかも契嵩の『鐸津文集』と覚範の『石門文字禪』とともに、ならび評されているほどである。⁽¹⁹⁾『文集』も『詩集』も、五山版の遺品は比較的に多いが、宋版はきわめて稀な存在である。

まず、『文集』であるが、宋版は書陵部に零本一冊を伝え

るのが、現存唯一の遺品である。すでに第二項で述べたように、書陵部本は、「北畠全集」と名づける五冊本中に含まれている。「北畠全集」については、解題で書誌的なことは紹介されているが、見やすく一覧すると、つきのような調冊となつてている。

第一冊	『詩集』卷一・二	
第二冊	『』卷三・四	五山版
第三冊	『』卷五・六	宋版
第四冊	『文集』卷七・八	
第五冊	『』卷九・十	宋版

右のように、三種の混成中、『文集』の宋版は、卷七一〇までの零本一冊である。そして、この零本宋版は、左右双边、有界(21.8cm×15.9cm)の匡郭、一四行二四字の行格、版心の形式などの書誌的形態が、後述する『詩集』の宋版・五山版と完全に同一であることが注目されるのである。さきの『語録』や『外集』よりも大版であり、宋版の禪籍としてはぜいたくな部類に属する。

この宋版には、かなり多くの刻工名が刻されている。従来、長沢規矩也氏によつて「北畠全集」の刻工名が紹介されてしまつが、おそらくそれは五山版までも含むと思われるから、ここでは『文集』卷七一〇の部分の刻工だけを厳密に紹介しよう。(漢数字は巻、アラビア数字は丁数)

賈（七—1・14・15・18、八—3・4、一〇—1）

賈義（八—1）

義（九—18）

史（七—2・3・6・7・11・16・17、八—14）

婁（七—4・5・8・9・12・13、八—17・18、九—11、一〇—

3）

良（八—11・12）

僅（九—9・10）

ところで、成竇堂文庫には、宋版の『詩集』三冊を所蔵するが、そこにみられる刻工名²²と照合すると、右の『文集』の刻工中、「賈」「賈義」（この二者は同一人であろう）「婁」の三者が合致し、ほかにも「良」は「馬良」に、「史」は「史儀」に、それぞれ擬せられるという、注目すべき事実がある。いまでもなく、版式や刻工名の一一致は、それだけで両書の刊行が密接な関係にあったことを示唆している。ただ、さきの『語錄』と『外集』のように、『文集』と『詩集』も同時期の合刻であつたかどうかについては、さらに細かな検討を経てからにしたい。

さて、宋版が零本しか伝わらぬ以上、完本の五山版によつて、宋版の原型をさぐるよりほかはない。五山版のうち、筆者がみたのは内閣文庫と成竇堂文庫の所蔵本二種であるが、この中で内閣本は前述の「北磯詩集」全九冊中の一本である。

これらの『文集』の五山版諸本は、調冊の体裁こそさまざまはあるが、元来の調卷（内容項目）は左記のような構成をとつていて、

1 北磯文藁叙 嘉定丑（一二一七）、張自明撰

2 本文卷一（賦）

卷二（詞、記）

卷三（賦、序）

卷四（賦、題）

卷五（伝、序）

卷六（銘、贊、箴、頌、弁、帖、跋）

卷七（跋、題）

卷八（疏、榜）

卷九（疏、文）

卷十（銘、祭文）

3 題 永嘉普觀義間宣子

4 刊記 「崔尚書宅刊梓」

この五山版の版式なども、またさきの宋版に等しい。さらに、原刻の刻工名さえも遺存するから、右の構成内容は、そのまま宋版のそれを踏襲していると推察される。

かくして、宋版の原型は五山版によつてたしかめられたが、宋代刊行の事情などを知るために、序跋を考察しなければならない。まず、巻頭の張自明による叙を、五山版を底本とし、四庫全書本で対校して、つぎに掲げよう。

北磯文藁叙

慶元初、予始入太学、於時偽學之禁嚴。台官胡紘司業高文虎、表裏為爪牙、搏噬無虛日。學校諸生、語言小異、輒坐偽罪、不以聽。予浮沈其間、日以短氣、遇休沐。卒一遊南北山、得士於北磯、相羊林泉、吟美風月、足以消遣世慮。然予學乎泗水、北磯學乎靈山、予固不及彼、彼亦不予以也。居數季、北磯出天台為導師、而予更憂患歷兵間、自荆楚浮江漢、以歸至東海上、則南北山、無復相誰何矣。予時以特薦補官、不受擢第太常、寓輦轂下北磯、以並書相勞苦、寄新詩啓予、出語益峻偉。予既歸江西与盱江刺史言、北磯於今為偉士。刺史走書邀北磯、唐僧紹隆所開山處之、北磯高臥不肯起、既而江東部使者、以東林・雲居力致之、亦復不肯起。今季、予歸自嶺表、北磯游華亭。知予入長安、駕小舟看予於清河坊舍、握手道契闊、寸有三季如一日也。讀其文、宗密未知其伯仲、誦其詩、合參寥・覓範為一人不能當也。雖然、北磯無學之宗也、文於何有、見之文者、似焉而已矣。北磯於人不苟合、合亦不苟睽、取舍去就之際潔如也。其名居簡⁽²³⁾、其字敬叟、其生潼川。寓北磯之日久、故人不名字之、稱北磯云。

嘉定丑十月望日 吳江張自明誠子叙

印 印 印

張自明については、その序文中に記される以上の伝記は不明であるが、北磯と古くから親交があつたことは、みずからの言によつて知られる。なるほど、『外集』の偈頌類の中にも「吊朱堅老張誠子文人」なる七絶一首があつて、それを証している。

問題は、この序題が「北磯文藁叙」とあつて、嘉定一〇年（一二一七）に書かれている点である。この年時は、北磯の示寂を三〇年もさかのぼり、あたかも彼が靈隱寺の北磯に閑居してまもないころに相当する。つまり、右の叙は、北磯の生存中に『北磯文藁』なる書名で出版されたときの序文とみられるのである。ところが、現在われわれがみる『文集』の本文は、宋版をはじめとして同一内容であるが、その中には嘉定一〇年以後の記事がたくさん含まれているのである。したがつて、現存する『文集』は、北磯の生前に刊行された『北磯文藁』の増補版であることが知られる。

では、書陵部本の宋版は、いつ、たれによる刊行なのであらうか。いったい、この『文集』には、編集名が明示されていない。また、前掲の物初が淳祐一年（一二五二）に書いた「行狀」は、『詩集』『文集』の四〇卷が世に行われている、とのべていた。伝存本では両書で二〇卷であるから、四〇巻とは調冊の細分化による数え方の相違かとも思われるが、淳祐一年の時点では、すでに増補版は刊行されていたのである。

* 叙題ナシ * 体一休 * 潤一磯 以下全テ同ジ * 季一年、
以下同ジ * 啓一欣 * 刺一刺、以下同ジ * 簡一簡 * 「定」
ノ次ニ「丁」字アリ * 「自明」ノ二字ヲ小サク作ラズ * 三
ツノ印記ナシ

義問宣子なる人の跋は、この増補版刊行の際に付せられたのであらうか。五山版によれば、文はつぎのとおりである。

余、自総角時、読張穎周礼義論策。蓋蜀所謂省元者、雖場屋之文、而得宣公奏議体、一時学者、実佳尚之。謹言、蜀固有人、少長從止、斎岷隱游蜀、士夫王惠修徳。特見其濃墨大字、妙兼衆体、而未見有所述作也。晚為浮岡北磯。相与治比、而詞章獲見之、高論偉然無雷同。其佶屈聱牙、雖問字於楊雄、仮詞於柳州、曾不是過。烏乎、旨哉、北磯蜀人也。蜀有山水之秀、是多異人、要非甚異者不出、則北磯其人也。其徒会粹成編、因抗筆以題其卷端云。

永嘉普観 義問宣子

跋文の撰者、永嘉（浙江省温州）普觀なる義問宣子については、遺憾ながらまったく不詳である。したがって、年記もなく、文意からも書誌的な手がかりはえられないものの、「崔尚

書宅刊」という刊記と同一紙に刻されているところから、この跋は増補版の刊行時に付けられた一文と考えておきたい。

『文集』の後代においての刊本としては、元禄一六年（一七〇二）刊の木活字版四冊が、松ヶ岡文庫に所蔵されている。⁽²⁴⁾ 未見ではあるが、おそらくは五山版を承ける一本であろう。

また、大陸では清代の乾隆四三年（一七七八）に校訂淨写されて、かの「四庫全書」に収録されている。近代の「四庫全

書」珍本二集に影印され、さらに一九八〇年に台北の明文書局刊行の「禪門逸書」初篇第五冊の中に再印され、こんにちは容易に本文が見られるようになっている。しかし、該書には張自明の序はあるが、義問の跋はみられない。四庫全書の底本は明示されないが、宋版か五山版のいずれかであると思われ、跋は省いたのであらう。

つぎに、『詩集』九巻についてみよう。まず宋版については、さきの書陵部蔵の零本一冊のほかに、成竇堂文庫には現存唯一点の貴重な完本三冊が所蔵される。成竇堂本については、『成竇堂善本書目』に解題をおさめ、また、巻三の末尾と巻四の巻首の写真が、『成竇堂書影七十種』の中に影印されている。解題は簡にして要をえてるので、以下に引いておこう。

北磯詩集 九巻 宋紈居簡撰

三冊

宋刊本。左右双边。十四行二十四字。匡郭内縱七寸一分、横五寸余。版心に字数及び刻工の名あり。巻首に葉水心の題詩あり。旧刊本応安甲寅祖応の跋を写す。本書の宋刊本は夙に本国に伝を失へり。此書每冊首尾に「青柳軒常住」墨書あり。明治三十八年鎌倉円覚寺帰源院所獲。⁽²⁵⁾

と一致すること、すでに述べたとおりである。ただ、この解題では不明な全体の調査と構成、および補写の箇所などを卷別に一覧すると、左記のとおりである。

△第一冊▽

- 1 識語 明治三九年、徳富蘇峰筆
- 2 題詩 葉適撰
- 3 目録（卷一～九の細目）

4 本文（卷一～二）

△第二冊▽

同（卷三～五）

△第三冊▽

同（卷六～九、但し卷九の第2・4の二丁は補写）

5 刊語 応安七年（一二七四）、祖応撰（補写）

右のように、成竇堂本は末尾に祖応の刊語を補写し、卷首に徳富氏の識語をおくが、これらは後代の付加であるから、

卷九の二紙を補写するだけの、ほぼ完全な宋版である。なお、卷九と刊語の補写は、ともに古い同手の手蹟である。また、徳富氏の識語⁽²⁶⁾は、本書に対する書誌的にすぐれた解題となっている。

ところで、この『詩集』の五山版には、数機関の所蔵が知られるが、筆者がみた内閣文庫と成竇堂文庫のものは、右の宋版と同じ構成であり、版式等も等しく、しかも、末尾の祖

応による跋文は、立派に印刻されているのである。したがつて、宋版の原型は成竇堂本宋版の1から4までに相違ないことが確かめられ、五山版はこれを忠実に覆刻し、末尾に祖応の跋を付刻したテキストなることが知られる。ただ、宋版の原型は判明しても、刊記が存在せず、葉適の題詩にも年記がみられないので、宋版『詩集』の印刻年時は依然として明瞭を欠いている。

葉適は、生没年不詳の人であるが、『宋史』四三四に所伝がある。水心先生と号し、淳熙五年（一一七八）の進士で、大學正・博士となつた学者であり、『水心文集』『水心外集』などの著作がある。⁽²⁷⁾ 北畠よりもやや年長と思われるが、その親交については、北畠の略伝でふれたとおりであり、また、『詩集』の中にも二点の関係した詩がみいだされる。⁽²⁸⁾ この葉適の題詩を、宋版によつてつぎに示そう。

水心先生酬北畠詩帖

奉酬光孝堂頭禪師 竜泉葉適

簡師詩語特驚人、六反掀騰不動身、說与東家小兒女、塗紅染綠未禁春。新詩尤儕、三腹媿歎、然有一説、不敢不告。林下名作、將以垂遠、不可使千載之後、集中有生日詩。此意幸入思慮、何時共語、少慰孤寂。

適

この題詩は、葉適が淨慈報恩光孝禪寺の住持である北畠の

詩帖に題して賦した詩にほかならない。北畠の淨慈寺住持については、光緒一四年（一八八八）刊行の『淨慈寺志』では、

『増集錄』なる資料によつて、宝慶二年（一二三一六）から紹定二年（一二三一九）までとしている。⁽²⁹⁾これにしたがえば、右の題詩が奉納されたのは、この三年の間ということになろう。

またいっぽう、一〇〇〇余首の詩作中、年時をもつ題名に注意すると、卷八に「丙申六月二十六日作飄風行」とあるのがもつとも遅い年時である。丙申は端平三年（一二三六）であり、北畠の示寂前一〇年に当る。したがつて、『詩集』の初刻は、すくなくとも端平三年から北畠の示寂までの間であつて、そのときに葉適の題詩が付せられたのであろう。

ここで、さきの『文集』との刊時に関する問題を考えてみ

よう。『文集』は『北畠文藁』の増補版であるが、刊時は不明であった。しかし、収録記事の中で年記をもつ文に注意すると、卷五の「送觀書記序」と「無外序」⁽³⁰⁾とにおける嘉熙戊戌（一二三一九）が、もつとも遅い年時であることがわかる。『詩集』中のもつとも遅い年時とは、二年のへだたりである。しかし、『詩集』は年時の記載がきわめて稀であることを考慮すれば、二年のへだたりはあまり問題にならない。むしろ、さきにみたような版式や刻工名の一致という明瞭な事実からみて、やはり『文集』と『詩集』は同時期の合刻であつて、その時期は嘉熙二年（一二三一八）以後まもないころ、

と推定してよいであろう。

ところで、前述の五山版『詩集』に付せられている、祖応の刊語に注意しよう。この文は、無題であるが、彼の詩集を集めた『早霽集』では「跋重刊北畠詩後」という題名があり、元來の性格が知られるのは貴重である。文は、はなはだ長文であつて、仏教者の詩作を論ずる一種の論攷といつてもよい。ただし、書誌的な事項もわずかながら文末にみられるので、その部分のみを引いておこう。

古岩峨公、尽將北澗平生文字、僕工鋟木、不終而遽爾。其徒周楨書記、善卒先志。峨、長崎之子、世稱名家、視其所曉、可以知其人焉。應安甲寅孟春下澣 雲水僧祖応記

いつたい、撰者の祖応とは、東福円爾—潛溪処謙—夢巖祖応と承ける、東福寺四〇世の住持である。⁽³²⁾かれの刊語によれば、北畠の詩文は、古岩峨公の遺志を継いで、門徒の周楨書記が刊行したのであつた。古岩峨公とは、夢窓疎石下三世の古岩周峨（*—一二三七一）その人であり、やはり詩文に長じた五山の学僧であつた。⁽³³⁾中巖円月とも親交があり、北畠については特別な関心を寄せていたのであろう。周楨書記は、古岩の法嗣、幹翁周楨であつた。ともあれ、北畠の詩文は、わが五山の僧たちの注目をあつめ、『語錄』と『外集』が合刻された三年後、その渴をいやしたのであつた。

もつとも、『文集』と『詩集』が応安七年の合刻であるとは、どこにも明記されてはない。しかし、宋版が合刻とみられ、また、『語録』と『外集』が宋版・五山版ともに合刻とみられるから、『文集』と『詩集』も五山で合刻されるのは、おそらくは自然の経緯であったと推察される。さきに筆者は、川瀬氏による四書の五山版合刻説には疑議を呈したのであるが、二書ずつが別時に合刻されたと考えるものである。

合刻といえば、前述のように、元禄一六年には『外集』と『文集』が、同年に常信により木活字版として出版されているから、おそらくは合刻である。これに対して、宝永三年（一七〇六）には『語録』と同じく『詩集』もまた、常信による木活字版として出版されているから、これまた合刻とみられる。常信については、目下のところ明らかでないが、北磯

に対して特別の関心を寄せていた人であることは想像に難くない。とまれ、北磯の四書のうち、江戸期には五山版と異なる書同志が組み合わされて合刻されている点、版刻史上、はなはだ興味ある事例を呈するものである。

ところで、近年の「禪門逸書」初篇第五冊には、『文集』のつぎに『詩集』の巻一から四までの部分を影印している。底本は「朝鮮旧刊本」と明記する。ところが、テキストを精査すると、書誌的にはわが五山版にのみ完全に一致するのである。筆者は寡聞にして、朝鮮半島で『詩集』が開版された

という記録を知らない。また、このテキストには、「蓮圃叢書」という旧蔵印が捺されている。「蓮圃」とは、かつて清末に吳興（浙江省）の蔵書家であつた張乃熊の蔵書室名であり、右の旧蔵印はその蔵書印にほかならない。³⁴⁾ そして、この蔵書の大部分は、後に台湾の国立中央図書館に譲渡されたといわれる。³⁵⁾

したがつて、この「禪門逸書」の影印本は、かつて蓮圃蔵書に含まれ、現在はおそらく中央図書館に所蔵される、わが五山版の零本を底本としているのではないであろうか。そうであれば、『詩集』九巻の五山版は、完本の所在が日本には数ヶ所も知られている現在、せつかくの稀観書影印でありながら、テキストとしての価値を半減させているのは、惜しみてもあまりあるといえる。

いったい、大陸では、北磯の著作が南宋以後に重刊されない。とまれ、北磯の四書のうち、江戸期には五山版と異なる書同志が組み合わされて合刻されている点、版刻史上、はなはだ興味ある事例を呈するものである。

の項目には、「北磯詩集」の記載を見る。ちなみに、この蔵書室は脈望館と名が変り、さらに絳雲樓へと移されたが、蔵書の多くは焼失したといわれる。³⁶⁾

この点、五山版や木活字本で重刊をかさねた本邦は、まだテキストには恵まれた状態にある。駒沢大学図書館には、古

写本の『詩集』三冊が所蔵される。宋版・五山版の版式をほぼ忠実に謄写した近世初期ごろの美本であり、もと西莊文庫の旧蔵書として注目される一本である。

以上、北磯の全著作に関する書誌的な考察を行ってきた。

その結果、不充分なところもあるが、各個々の典籍類に関して、成立の事情、古版の原初型態と版刻の時期、および、後代の重版とその特徴などの諸点を、ほぼ明らかにしたと思う。ただ、所論が多方面にわたり、また互いに関連事項が多くなため、わかりにくいくことをおそれるものである。したがって、さいごに、重要な点だけを箇条書きにして、総括しておこう。

一、『語録』と『外集』は物初の編集であり、後者には「統集」「行状」も含まれる。また、宋版・五山版とともに合刻であり、宋版の初刻は淳祐二年（一二五二）である。

二、『文集』と『詩集』は物初以外の北磯の弟子による編集であり、宋版・五山版ともに合刻とみられる。宋版の合刻時期は嘉熙二年（一二三八）から間もない頃である。

三、宋版の『文集』は、嘉定一〇年（一二一七）序刊の『北磯文藁』の増補版である。

四、木活字版は、『語録』と『詩集』、『文集』と『外集』、をそれぞれセットにした合刻とみられる。

五、「北磯全集」は五山の合刻ではなく、近代における編集名にすぎない。

なお、北磯の著作四点の各宋版原型と、その宋版部分の所在者名、および、各テキストの系統図を、文末に附録した。

五、物初の『語録』と『臘語』

物初大觀（一二〇一—一二六八）も厖大で貴重な著作を撰した禅匠であつたにもかかわらず、現今、その文献が不遇であること、むしろ北磯以上の感がある。なるほど、その『語録』一巻は正統蔵經に収められているから、閲覧はきわめて容易であるが、物初の著作の本領は、『物初臘語』（以下『臘語』）二五巻にある。

だいたい、「臘語」とは無用の言という意味であるが、これは撰者物初の卑語であつて、『臘語』に収まる大量の文操類は、当代禪林の状況を知るべき絶好の文献資料から成る宝庫となつてゐる。ところが、『臘語』の現存テキストは、宋版が一本、わが近世初期の木活字版が一本、その他、筆写本二本が、それぞれ所在が知られるだけであり、『新纂禪籍目録』が著録する元版や明版³⁷については、伝存の記録さえ知られていない。したがつて、この貴重資料も、これまでほとんど利用されていない。ここに、書誌的な方面だけでも紹介

しょうじかる理由は、こゝへした現状を考慮したからである。

まず、宋版テキストには、成賓堂文庫に『臘語』と『語錄』を合わせた全一〇冊本が所蔵される。この桐箱に收まり古色蒼然たるやや大型の美本は、文字どおり天下一本の宋槧本として、貴重性の上もない。ところど、これまで本書については、『成賓堂善本書目』の中だ、

物初臘語
二十五卷

物初和尚語録 不分巻、宋釈大觀撰 十冊

宋刊本。左右双辺十一行二十字。「宝珠庵常住」の印記あり。

仏國禪師の将来に係ると伝ふ。

と記載されるだけである。今日としては、簡にすぎるくらいがあるので、以下、ややくわしく書誌的な事項を紹介しておこう。

卷 冊	『臘語』一十五巻九冊、『語錄』一巻(不分巻) 一冊
装 訂	線装、袋綴
表 紙	朱肉色(外表紙 26.5cm×13.1cm)、黄ばんだ白色 (内表紙)
題 簿	「物初臘語序目」「物初語録」(いざれも内表紙のみ)等
内 題	「物初臘語目録」等

紙質	唐紙(縦裏打)
行格	毎半葉一一行、毎行一〇字
匡郭	有界、左右双辺
版心	白口、黒魚尾「目録(丁数)(刻工名)」
小口	なし
書込	朱点あり
朱点	朱引あり
朱引	多くあり(別記)
補写	あり(別記)、木記
刊記	蔵書印
蔵書印	一四種あり(大部分は徳富蘇峰氏のもの)
蔵書印	なお、右の特徴は、『臘語』と『語錄』の双方に共通している。また、各巻冊と丁数の関係を一覧すると、つぎのとおりである。(アラビア数字は丁数)
第一冊	序(6)、目(26)
第二冊	卷一(5)、卷一(5)、卷二(6)
第三冊	卷四(8)、卷五(9)、卷六(6)
第四冊	卷七(8)、卷八(9)、卷九(17)
第五冊	卷十(22)、卷十一(16)、卷十二(19)
第六冊	卷十三(18)、卷十四(9)、卷十五(16)、卷十六(16)
第七冊	卷十七(14)、卷十八(18)、卷十九(16)、卷二十(18)
第八冊	卷二十一(17)、卷二十一(14)、卷二十二(22)

第九冊 卷二十四(20)、卷二十五(28)

第十冊

語録(55)

さらに、補写の部分を一覧しておこう。

序 1~3
目 1、6~10、13、23

卷一 1~2 二~7~9、12~15、三~1~4、四~3 五
一~8~9 六~11、15~16 七~7~8 八~2~3

九~7~9、12 一~12 一~1~2~11 一二~12、
14~17 一九~1、3~4 二~1~14~17 二五~20~

21

語録 11、39、45~46、51~52

右のように、本書は六五紙が補写されているが、すべて同一手であり、本邦中世の筆者によるものと思われる。なお、卷二〇の末尾は一丁を欠くが、その部分の本文は裏表紙の裏に補写され、わずか一行だけの本文であることが知られる。また、ほとんどの巻首の下部にある「宝珠庵常住」の墨印が、みな墨で消去されている。宝珠庵については不詳であり識語もみられないから、さきの解題がいう仏国禪師の将来云々についても、その根拠は不明である。

つぎに、本書には多くの刻工名が刻されている。これはまだ未紹介のようであるから、以下、「贋語」と『語録』に分けて記載しよう。(アラビア数字は丁数)

〔贋語〕

吳

吳漢

序 1~4
目 1~5・21、八~1、九~2、一一~1・16、
一三~4・17、一五~3、一六~11、一八~2
・4、二~1~8、二三~1~1

建安吳漢

東吳

章湘

□湘

章

章方竹

二~4~3

万竹

二二~6、二三~5、二四~13~15、二五~3

大万竹

二五~28

范生

一三~17、二〇~18

二二~3・4・9・10、二四~20
一五~8・14

目 11~12

二三~6

目 22、二三~19~20、二四~1、二五~11~12

19

一六~16

〔語録〕

吳漢	15	•	21	•	25	•	31	•	36
季文	1	•	13	•	29	•	33		
洪公	37	12	•	32					

右の刻工調査によつて知られるのは、『贋語』と『語録』の相方に、同一名の刻工が少なくとも二名（吳漢・季文）は従事しているという事實である。これは、両書の書誌的特徴が全く同であることからも、合刻されているものとみてよい。なお、右の刻工名は、すでに公表されている宋版刻工名表に照らしても、同一人と断定できる人は他に見当らない。

1 序 咸淳丁卯（一二六七）、物初大觀撰

2 『贋語』の目録（卷一～二五）

3 『贋語』の本文（卷一～二五）

4 『語録』の本文 門人徳溥等編校

5 刊記

まず、1の物初による自序であるが、内容はきわめて難解であるが、文中、門徒が粹を編成したとあるから、この書も門人の編集であり、そこに自序を付したのである。序文は、宋版では前半が補写されているが、全体に古活字版と比較す

ると、文字の異同が多い。左に宋版を底本とし、内閣文庫所蔵の古活字版で対校しておく。

与世同波、於世無涉冷。然其間、亦聊以自適、万象為賓朋、万籟為鼓吹、期亦足矣。欄隙彷徉、白間虛明、奧弗容遁、竺冊魯典、遮眼為樂。或便謂予從事乎討論矣。職提唱外、酌應或需韻句、事功或需記錄。或求於予性、不善拒然、法不孤記、理不它隔、言在此而意在彼。或便謂予長乎文言矣。纔一脫藁搢、不見蹤跡、如是者有年。吾徒嘿予潛會粹成編、擎於予前、恍然永師後見、見破甕中、物前身知藏僧、忽省書未了、經也翻揭、增艱自訟、斐淺輕出、欲斂而秉界之、嘿捍護堅甚。則訓之曰、吾宗素不尚此、母重吾適嘿曰、目連之集、異鶩子之法蘊泊。夫華・竺諸賢、棄多論著雜華、取淵才雅思又如何。予因自笑曰、治亂不閑寵辱、不聞山林自跼、寂默自業、予老之贊人也。謬當知宗亦有本末、瑣瑣筆墨、亹亹酬應、又吾之贊事也。說而無說、文而非文、又吾之贊語也。人贊事贊語贊惡、足淺其中有無欠贊句、亦或有所取哉。

咸淳丁卯夏五 玉几山人物初大觀自序贊語

印 印 印

* 酷—酷 * 記—紀 * 予—子 * 粹—粹 * 自—目 * 瞥—
凌 * 浅—識 * 「大觀」ノ二字ヲ小サク作ラズ * 以下ノ印

記三箇ナシ

つぎに、5の刊記であるが、これは『語録』第五四丁裏の空欄を利用して刻されている左記四行の木記である。

碩人魏氏道昌施財
命工鏤板以垂後學

功德報恩
四恩三有

このように年記はなく、施財者の魏氏道昌についても不詳である。しかし、前述のように、両書に共通する書誌的特徴と刻工名とによって、『贋語』と『語録』は同時期に合刻されたと推定されるから、右の刊記は、合刻本全体を代表する木記とみるべきであろう。

それでは、合刻の時期はいつであったのだろうか。『贋語』の自序は、すでに物初の示寂前年に書かれていた。しかし、『語録』の編集は、はたして物初の生前であったかどうか。いったい、『語録』は宋版以下の各テキストに異同はなく、つぎの構成をとっている。宋版によつて、名称と丁数を記載しよう。

1	物初和尚住臨安府法相禪院語録	2
2	安吉州顯慈禪寺語録	
3	紹興府象田興教禪院語録	
4	慶元府智門禪寺語録	
5	慶元府大慈名山教忠報國禪寺語録	
6	慶元府阿育王山廣利禪寺語録	
7	小參	
8	法語	
9	頌古	
5	2	4
2	4	10
10	4	2
4	2	3
		2

10 仏祖讚偈頌附
11 偈頌
12 小仏事

1 4 8

そして、3を除く五處の語録の内題のつぎには、「門人徳溥等 編校」の七字が刻されている。注目すべきは、6の広利禪寺語録の末尾に、「垂寂前六日上堂」なる一篇が収められていることである。この事実によつて、『語録』は物初の示寂後に、徳溥を中心とする門人たちによつて編集されたことを知る。おそらくはこのとき、すでに『贋語』は版木に彫られていた。そして、急いで編集された六会の『語録』をこれにくわえ、そこに刊記をおいたのであろう。さきに引くよう、物初の法嗣である晦機が、元の延祐二年（一二一五）に書いた物初の塔銘によれば、『贋語』六冊と『六会語』の一冊があるとのべている。⁽³⁹⁾これが宋版初刻本の体裁であり、全七冊が合刻されたのであろう。

元代以降、大陸では物初の著作が重刊せられた記録はみられない。これに対して、わが五山では『語録』を出版している。大東急文庫・成實堂文庫・両足院・天理図書館の各所蔵が知られるが、筆者は前三者の五山版を閲覧している。中でもありがたいことに、成實堂文庫では、五山版と宋版の『語録』を相互に照合するという、稀有の機会に恵まれたのである。すると、両者は版式や行格はもとより、刻字体も同一で

あつて、五山版はまぎれもなく宋版の模刻である確証をえることができた。ただし、五山版の丁数は五〇丁であり、宋版よりも五丁すくない。これは、五山版では各語録の末尾に、つぎの語録の本文を追込んで刻字し、遊び行をつくるいために、全体の丁数が削減されているからである。

また、五山版『語録』の末尾には、宋版にみられる四行の刊記に代つて、つぎの刊記三行がおかれる。

法縁比丘円月施財
命工鏤板以垂後学
功德報答四恩三有

この刊記が宋版のそれと異なるのは、「法縁比丘円月」の六字だけである。そして、この円月こそは、いうまでもなく大慧下七世の中巣円月その人であろう。

中巣は、前述のように、応安三年（一三七〇）には北磯の『語録』と『外集』を刊行しているが、その五年後の永和元年には寂している。したがつて、右の五山版には年記がない

が、永和元年（一三七五）以前の出版であることはまちがいなし。ふしぎにも、五山版の物初の『語録』は四点も伝存しない。

がら、『曠語』の五山版は知られていない。この点に疑問は残るが、いまは、中巣による刊行は『語録』だけであったと考えておきたい。なお、摺刷のよい大東急本『語録』の五山版については、すでに解題による紹介がある。⁽⁴¹⁾

下つて近世には、『曠語』と『語録』が別個に重開されていり。まず、近世初期刊行の古活字版六冊本の『曠語』が、内閣文庫と尊経閣文庫に伝存している。⁽⁴²⁾ 刊記はないが、行格は宋版に等しく、遠く宋版を承ける刊本とみられる。ただし、目録は宋版よりも整然とし、前者の誤りが訂正されるなどの改良がほどこされている。本書の本邦における唯一版のテキストとして、その存在は貴重である。なお、永平寺には慧達の筆写する五冊本、大阪安福寺にも古写五冊本が⁽⁴³⁾、それぞれ所蔵されるが、未見なので、ここに紹介できないのが遺憾である。

いっぽうの『語録』は、宝永三年（一七〇六）に常信が刊行した木活字版が、大東急・松ヶ岡・岸沢の三文庫と駒大図書館に所蔵されている。この中で、大東急本はもと久原文庫の所蔵のとき、大正九年の第六回大蔵会に展観された際の目録に、刊記が紹介されている。⁽⁴⁴⁾ 駒大本のそれも同じである。すなわち、

宝永丙戌孟春穀旦開活板于宝陀岩下以成流通伏願仏日增輝法輪常転 常信

とあり、以下、五山版に刻されていた刊記、つまり「法縁比丘円月……」という一四字を刻している。これによつて、木活字版は五山版の重版であることがたしかめられる。そして、刊行者常信は、さきにみたように、宝永三年には北磯の『語

録』と『詩集』も出版しているから、物初の『語録』も合刻などの密接な関係にあつたものと推定されるのである。ついでに、正統藏本の『語録』には刊記がみられず、その系統は明瞭を欠いている。

以上、物初の著述に関する書誌的考察をしてきたが、『贋語』の五山版が伝存しない理由などの疑問点がのこつたのが気がかりである。今後の検討課題としなければならないであろう。いまは、『贋語』の資料的価値を考え、古活字版により、その目録だけを翻刻しておく。斯方面の研究者にとって、今後の利用活用のための一助となればよいである。

注

- (1) 従来の宋代禅宗史関係の研究では未検討のようであり、『禅学大辞典』にも解説されていない。斯方面の研究がおくれていることの一証である。
- (2) 石井修道「仏照徳光と日本達磨宗（下）」（『金沢文庫研究』第110巻第一二号）参照。
- (3) 『禅学大辞典』別巻所収の「禅宗法系譜」では、中巖派は中巖円月五世までが記載されるにすぎない。
- (4) 本稿のうち北畠の著作に関する部分は、拙稿「宋元版禪籍研究（七）—北畠語録・外集・文集・詩集・全集一」（『印度学仏教学研究』三三一）を大幅に補訂したものである。
- (5) 『北畠外集』の巻末、および、『物初贋語』114に所収されるが、文字の異同がある。
- (6) 清代乾隆二十二年（一七五七）刊『明州阿育王寺志』（『中国佛寺史志彙刊』第一輯11）卷八所収。

(7) 『中國佛寺史志彙刊』1-11-p.392
p.487a なお同書には、p.207にも「北畠全集」としての目録、p.173-174にも「北畠全集」に対する全体的な解説記事が、それがみられる。

p.190a-b

(8) もいふむ、近世の木活字版によつてしめしむと考えられるが、じやれどしむ、正統藏本の底本を知らざる要點となる。ただし、玉村竹一氏は中巖の著述を異本を含めて一九種も紹介してくる（『五山文学新集』四-p.1243-1253）から、その中のじやれかに存在するかもしねえ。

(9) 両足院本については、『大藏会展観目録』p.513に簡単な解題がある。

(10) 『扶桑五山記』によれば、靈隱寺の世代は心月が三六世、普濟が三七世である。

(11) 物初の撰した北畠の「行状」では劉朔斎とされる人。この人が劉震孫であることは、五山版「北畠語録」に存する劉震孫の序文末尾にみえる四つの刻印中、「朔斎」があることによって確かめられる。その他の刻印に、「元祐宰相忠肅翁」なる文字も存する。

(12) 物初と秋房楼の関係作品を「物初贋語」から拾うと、「寄秋房樓大卿」（卷1）、「送秋房樓侍郎師越」（同）、「寄秋房侍郎二首」（同）、「春秋房樓侍郎」（卷7）、「秋房樓侍郎絵四時寿容命賦之各一」（同）、「秋房樓侍郎」（卷11）、祭文の多くを見出す。

(13) 『大東急記念文庫貴重書解題』 p.146b-147a

(14) 『新禪籍目録』 p.456a

(15) 「四庫全書珍本一集」所収『北畠文集』の巻首提要（「禪門逸書」初篇、第五罪 p.1b）

(20) 『図書寮漢籍解題』漢籍篇 p.197 b

(21) 『長沢規矩也著作集』第三卷 p.185 c

(22) これも長沢氏によつて刻工名だけが紹介されてゐるが、その名前は「史儀、馬良、馬祖、婁成、賈、賈義、蔣」となつてゐる。(『長沢規矩也著作集』三、p.185 b)

(23) 「昔日当軒百歩威、幾人到此堅降旗、若非居士通方眼、誰識川僧陷虎機。」(宋版『北畠外集』偈頌9 a)

(24) 『新禪籍目録』p.456 a

(25) 『成竇堂善本書田』 p.309

(26) 德富氏の識語は、卷首に綴込んだ扉紙につぎのように記載される。(句読点、筆者)「此書、明治三十八年晚、於鎌倉円覚寺塔頭帰源院得焉。南宋精槧、中間雖有二三之補写、面目整々、真是鬼呵、神護之珍籍也。卷末跋文、自五山翻刻本補入乎。將五山翻刻本之原書乎。暫記俟後考也。雖然、其文字古色蒼然、乃為補入、恐可不下五百年也。紙質清脆、憾不便于翻閱、仍施背棟、補繕表紙、然期不様、旧時之面目也。後之手此書者、須愛護珍重也。蘇峰学人、至嘱々々。明治三十九年二月念一夕 四

(27) 望月『大漢和辞典』9—773 c

(28) 『酬水心葉待制見寄宿覓菴記并記』(卷1)、「与応真遇代逢山見水心侍郎」(卷11)

(29) 「理宗宝慶二年、北畠居簡禪師、奉旨主淨慈、道化大行。紹定二年、淨慈虛席。廟堂以鍾山石田法薰禪師、表達朝廷詔、遷本寺。」(『中興佛寺志彙刊』11—19—1736)

(30) 『禪門逸書』初編第五冊 p.70 a～b

(31) 『校訂五山文学全集』詩文部第一輯 p.836

(32) 玉村竹一『五山禪僧伝記集成』p.652参照。

(33) 同右、p.188 b

(34) 喬衍琯『書田』[編叙錄]所収「影印『遊圃善本書田』序」参考

照。

(35) 阿部隆一『^訂増中國訪書志』

(36) 拙稿「明代の一般書目にみえる古禪籍」(『駒沢大学仏教学部論集』一七)を参照。

(37) 『新禪籍目録』の著録は、元版も明版も書店目によるものであるから、実在典籍を確認してくるわけではない。

(38) 『成竇堂善本書田』 p.300

(39) 『中国仏寺志彙刊』1—11—p.392 たゞ注の6を参照。

(40) 川瀬一馬『五山版の研究』上 p.454 b

(41) 『大東急記念文庫貴重書解題』p.160 b～161 a

(42) 以下、物初の著作に関する所蔵者については、おもに『新禪籍目録』p.483の著録による。

(43) 『大藏会展観田録』p.207 b

(44) 同右、p.125 a

* 脱稿後、伯映泰については『田観經疏序解』『印行五燈記』各一巻の撰者である伯英祖泰に擬せられることが知つた。京都大応禅寺の住持で、右の二書は共に元禄初年に刊行されている。

△附録一▽

北畠の著作の宋版原型とその現蔵者

(宮) 宮内庁書陵部 (内) 内閣文庫 (成) 成竇堂文庫

『北畠語録』

- 1 題 刘震孫撰 淳祐二年(一二五二)
 2 書 靈隱心月撰 淳祐八年(一二四八)
 3 【序】 大川普濟撰 淳祐一年(一二五一)
 4 本文(一一處の語、小參、秉挾、普説、法語、頌古、偈頌、贊、小仏事、仏事) 物初大觀編
 (内) (首尾補写)

- (宮) (前半補写)
 5 後題 秋房樓治撰

『北畠外集』 (宮)

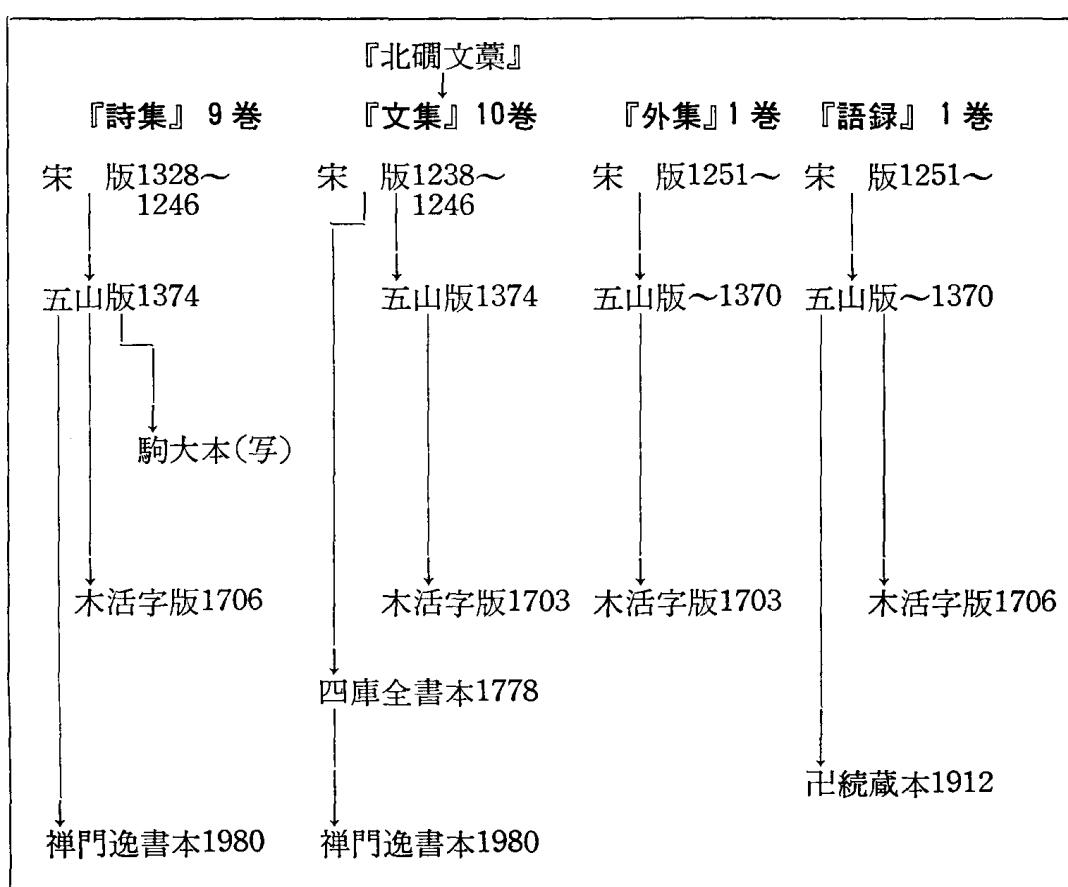
- 1 【序】 物初大觀撰 淳祐一〇年(一二五〇)
 2 本文(偈頌、贊、題跋、法語) 物初大觀編
 3 行狀 物初大觀撰 淳祐一年(一二五一)

『北畠文集』 (宮)
 1 叙 張自明撰 嘉定一〇年(一二一七)
 2 本文(賦、詞、記、伝、序、銘、贊、箴、頌、弁、帖、跋、題、疏、榜、文、銘、祭文) (宮)(卷七〇のみ)
 3 【跋】 義問撰
 4 刊記 「崔尚書宅刊梓」

『北畠詩集』 (成) (宮)(卷五六)

2 本文 門人編

△附録二▽
北畠の著作類に関する系譜



△附録三▽

物初謄語目録

卷之一

聽一師琴 喜雨次老人賀王百里韻 崔中書家藏閣本醉道士岡老
人命同賦 送鏡潭歸蜀 次韻酬陳上舍 春日雜書十首 為
崔學士賦梅山 除夜雪至人日 庵居寄友 茉松行 中庭榴
花盛開 苦旱 送梅山赴溫州支塲 聽僧彈獨清 酬虞府判
次韻山行 次錢槐隱韻 茨雪 安牧野住玉岡長慶 寿
應侍郎 呈劉秘書 積陰 枯木行 茨美 定齋 喜雨
桃源行 重九後二日宿頤蒙十五韻 径山会安危峰 東山
贈医工姚叔幹 送玉潤再遊廬山 刻源住華亭延慶 中書
書燈 次老人韻呈梅山學士 龔庸斎挽章 定林庵荆公讀書處
於鍾広文以詩還之 送友之毘陵 大寒 述懷 寄無隱
紙張 旱河成陸江潮忽及河舟可通田可溉田稚復活者十二三喜而賦詩
獨孤檜 天慶觀両龍 多景樓 稠都正挽章 中
游甘園 寄陳叔相家居 白雲山 贈筆工 送謙上人
之四明 径山曇希叟小軒名看不足 寄足庵聞不赴柳州 中書
程直院寓靈城二首 寄応直院 避暑東軒二首 涼棚
趙檢院二首 訪克斎葉□陽 梅用茂翠微四題韻 謝雪守
之子小沙弥求詩 净嚴菴蓮生双花和韻 客中積雨二首 朴菴
禮月堂及先師兩翁塔用先師卜築韻二句之水喜為作詩 食蒲萄有感 致嚴菴二首 夜聞秋声
日者狗隱 瓶桂二 賀応玉堂遷吏部二 兒童輩以木根植銀杏活以一
旬之水喜為作詩 食蒲萄有感 致嚴菴二首 夜聞秋声 贈
古松 顧蒙 晨涼 呈朔斎劉右司 風泉竹月為題二
遺以詩謝 樞寮 友雲 送薛遜之之維提 送僧之淮南
壽史尚書 冬溫 春雪 虎岡 義維那省父 曹
學士 贈刊碑陳洪 寄史藍田 藍田三和見教再用前韻 矩
老善五星 飛泉 贈梅畊 積陰 厲制相見示邵農紀游次韻
餞寄軒李君 寄史鶴臯明府兼呈民山 僧饋棲魚 燎爐
初寒 黃竹閣以詩見過次其韻

卷之三

呈馬制相 寿史資相 瓶中木犀 琥遺翁広文 過東山
自東山道至上虞 送李觀相 次胡提幹食筭韻 呈華亭李明府
酬虛舟 春雨 寿葉制相 雪止坐冷泉亭 次歐郡馬韻
方是間歌

卷之四

次萬俟上舍陪竹坡丘監丞避暑破山韻 子游廟 梅船 借文粹
於鍾広文以詩還之 送友之毘陵 大寒 述懷 寄無隱
書燈 次老人韻呈梅山學士 龔庸斎挽章 定林庵荆公讀書處
紙張 旱河成陸江潮忽及河舟可通田可溉田稚復活者十二三喜而賦詩
獨孤檜 天慶觀両龍 多景樓 稠都正挽章 中
游甘園 寄陳叔相家居 白雲山 贈筆工 送謙上人
之四明 径山曇希叟小軒名看不足 寄足庵聞不赴柳州 中書
程直院寓靈城二首 寄応直院 避暑東軒二首 涼棚
趙檢院二首 訪克斎葉□陽 梅用茂翠微四題韻 謝雪守
之子小沙弥求詩 净嚴菴蓮生双花和韻 客中積雨二首 朴菴
禮月堂及先師兩翁塔用先師卜築韻二句之水喜為作詩 食蒲萄有感 致嚴菴二首 夜聞秋声
日者狗隱 瓶桂二 賀応玉堂遷吏部二 兒童輩以木根植銀杏活以一
旬之水喜為作詩 食蒲萄有感 致嚴菴二首 夜聞秋声 贈
古松 顧蒙 晨涼 呈朔斎劉右司 風泉竹月為題二
遺以詩謝 樞寮 友雲 送薛遜之之維提 送僧之淮南
壽史尚書 冬溫 春雪 虎岡 義維那省父 曹
學士 贈刊碑陳洪 寄史藍田 藍田三和見教再用前韻 矩
老善五星 飛泉 贈梅畊 積陰 厲制相見示邵農紀游次韻
餞寄軒李君 寄史鶴臯明府兼呈民山 僧饋棲魚 燎爐
初寒 黃竹閣以詩見過次其韻

卷之五

送錢將仕帰旧第 過刻源隱居 徐迪功挽章 送石屏之泉南行
化 為傅提幹賦梅野 半湖樓 送深居赴会稽宰 賦応玉堂
葺芷 呈尹梅津 呈初堂 送日者余雲谷見余四川 老態
次十洲趙師機雪樓即事 山居雪寒 贈円医師時赴德清宰招
謁東臯學士 詠清師房菊數十種盛開 送半湖何府教 哭芳洲

遊南塘趙文昌園林 贈不回頭趙宣教 謁兩淮制使賈資相
 平山堂 多景樓 焦山 述懷 謝浙西倉使 怡雲 呈
 越師陳中書 次愚溪喜雨二首 宝成自壽 贈筆工 次药嚴
 高侍郎韻 送史藍田之任 恭謝 途中遇雪 送制使橘洲姚
 侍郎 贈平軒鮑制幹 錦鏡 寄梅山崔都廟
 太清 有感 用韻謝胡講書 次韻謝倉使 寄楚渡葉梅僊
 園丁送菊二首 涵海 象橋新塗卜建莊于朱監隙
 所見 送李景雨還鄉 舒殿元惠詩次其韻 寿相國 次史明
 府遊三觀韻 用韻酬鶴臯見寄斗牕 酬鶴臯韻稱寿二首
 省元賦半村 夜坐喜雪寄史明府 寿制使李觀文
 借先師客竺山時韻 拝明教大師塔 人前 謝曹娥廟 劍耕
 二首呈制使李觀文 李制相入山劭農示詩即席繼韻 呈奉邑愈百
 里 李檢閱惠詩次韻為謝 寿制使葉大資 桂山新築
 平孤山宋學士餉詩次韻 儒医周學論 游張氏園 持鉢五首寄
 道旧 春寒 残雪 即目 桂山趙仇香慧詩次韻 贈馮總
 管 応總幹餉詩次韻 贈刀鐫林生
 卷之六
 為丘監丞賦竹坡 寿朔齋劉使君 閔雨 喜雪 燭 簪日
 痘中 錢権院挽章 大平寺水 金山 焦山 凤凰台
 次崔提幹葵花韻 次韻秋晚舟中 摘茶 贈刀鐫 冬瓜
 子 僧葺舫齋 桂泉 西湖次劉學士韻 東山新築
 中秋前三日留子后上舍表兄 初寒 康南翁出示近作 喜雨
 讀疎寮集 參古術士 新梗 酬京學鄭畊巖一再入山
 菴 送瑩上人帰四明南湖 機謁俞提幹留宿 借榻東谷上方
 菊巖 澱山 庵居 樹廬 寄安吉郡文學院雲心 僧以詩
 見過次其韻 聽猿 碧沼菴 鐵菴宗師挽章 悼康南翁
 痘中潛山見過 游龍瑞宮 湖樓晚望 題山台浮碧亭
 七月大風雨 月泉 靈衛王廟 次韻題永壽 松風軒 趙
 使君 次海隱入山春遊韻 學僧寮 韻巖 為海隱賦林壑甕

遊南塘趙文昌園林 贈不回頭趙宣教 謁兩淮制使賈資相
 平山堂 多景樓 焦山 述懷 謝浙西倉使 怡雲 呈
 越師陳中書 次愚溪喜雨二首 宝成自壽 贈筆工 次药嚴
 高侍郎韻 送史藍田之任 恭謝 途中遇雪 送制使橘洲姚
 侍郎 贈平軒鮑制幹 錦鏡 寄梅山崔都廟
 太清 有感 用韻謝胡講書 次韻謝倉使 寄楚渡葉梅僊
 園丁送菊二首 涵海 象橋新塗卜建莊于朱監隙
 所見 送李景雨還鄉 舒殿元惠詩次其韻 寿相國 次史明
 府遊三觀韻 用韻酬鶴臯見寄斗牕 酉鶴臯韻稱寿二首
 省元賦半村 夜坐喜雪寄史明府 寿制使李觀文
 借先師客竺山時韻 拝明教大師塔 人前 謝曹娥廟 劍耕
 二首呈制使李觀文 李制相入山劭農示詩即席繼韻 呈奉邑愈百
 里 李檢閱惠詩次韻為謝 寿制使葉大資 桂山新築
 平孤山宋學士餉詩次韻 儒医周學論 游張氏園 持鉢五首寄
 道旧 春寒 残雪 即目 桂山趙仇香慧詩次韻 贈馮總
 管 応總幹餉詩次韻 贈刀鐫林生
 卷之六
 為丘監丞賦竹坡 寿朔齋劉使君 閔雨 喜雪 燭 簪日
 痘中 錢権院挽章 大平寺水 金山 焦山 凤凰台
 次崔提幹葵花韻 次韻秋晚舟中 摘茶 贈刀鐫 冬瓜
 子 僧葺舫齋 桂泉 西湖次劉學士韻 東山新築
 中秋前三日留子后上舍表兄 初寒 康南翁出示近作 喜雨
 讀疎寮集 參古術士 新梗 酉京學鄭畊巖一再入山
 菴 送瑩上人帰四明南湖 機謁俞提幹留宿 借榻東谷上方
 菊巖 澱山 庵居 樹廬 寄安吉郡文學院雲心 僧以詩
 見過次其韻 聽猿 碧沼菴 鐵菴宗師挽章 悼康南翁
 痘中潛山見過 游龍瑞宮 湖樓晚望 題山台浮碧亭
 七月大風雨 月泉 靈衛王廟 次韻題永壽 松風軒 趙
 使君 次海隱入山春遊韻 學僧寮 韵巖 為海隱賦林壑甕

訪西里趙使君 金山 舟中不寐 次韻酬蘋洲 呈橫槎
 高使君 送上虞陳明府 維揚報恩 観使丘判府挽章 春日
 湖上寓目 海巖自下竺遷上竺 雪 劇暑 城下雪霽 次
 春日行散韻 以筍淑茶寄史藍田 涵虛閣 齒鈍 霧
 足矣軒 客攜趙東閣詩藁見過 為葉梅僊賦棹渡 何提管見過
 冬至前治歸 酉石作院 窮秋雨 贈揚簫隱 獻雲訥宗
 師挽章 澄齋趙寺丞挽章 旅况 途中書所見 皇帝升遐
 雲間福田寺梅龍 次王南峰瀑布韻 蕊花小軸 東谷索題蘭幅
 喜雪
 卷之七
 小魚 蟬茶 峴山図 宝月塔 呂城道中 郭璞墓 読
 龍川文有感 夏夜 題橫幅 初夏雜興五首 梶子花二首
 瓶桂晚對三首 戲次勝叟索茶筭韻 中秋夜聞車聲四首 看鏡
 宿虞園 玉蘭 墨荔枝 春野 即事 叢山小軸
 秋夜 七夕 桓溪 梁楷郭索 雪磯 贈小僧 二月望雪六
 首 題鳩小幅 太虛九日惠詩次韻 夜起無燈 冬至日
 宜雪 江月樓 少陵跨驢 孟浩然鞭驢 送僧帰寧 峴山図
 平雲樓 余杭縣學綠野亭觀東坡旧題 石瀨道中 愚山詩士見
 訪 錢塘 舟中除夜 瘦巖索題蘭蕙 潘僊 秋房樓侍郎繪四時壽
 容命賦之各一 謁鎮江徐總卿 題猿 舟中 寿越帥史尚書
 夜舟擁爐蚊蠅復出 春雪途中 僧施文超 看松 山谷
 看月 雪竇偃蓋亭 呈相國十首 大礼觀賀四首 杜潘各二
 愚堂韻 史令君見過竹院 即事 憇憐 初五夜月 和靖
 索句圖 墨戲甜瓜 枯木二軸 橫枝手軸 瑞巖道中 次
 西禪 潘明府餉新荔

卷之八

斗室賦 石菖蒲賦 温蒲 蓬社図 水仙花詞 蛛虎説

狸鼠説 南昌侯竹良伝 蝸牛伝 人性 無牛説

觀音大士讀 摩里支天讀

祖画像讀 渡海十八羅漢讀

讀 度嶺 自明説 叔養字説 哀溺

哀嘉樹 王梁山母夫人真

讀 深明讀 無相禪師讀

十五

処西上人字 礼翁 養源 用堂 無礙 竹房 秋江

涌溪 仲肯字 幼潛字 石房 虚谷 剛中 養雲

虛舟

卷之九 記

梁智者法師祠堂

延恩舍利塔

禪院

普救律院

外錄

送濬維那刊大慧語錄

康南翁詩集

牧牛団

茶頌卷

重修人天眼目集後

重刊古尊宿語錄

卷之十 記

卷之十一 送下序

卷之十二 序

卷之十三 序

卷之十四 銘

卷之十五 跋

卷之十六

卷之十七

卷之十八

卷之十九

卷之二十

卷之二十一

卷之二十二

卷之二十三

卷之二十四

卷之二十五

卷之二十六

卷之二十七

卷之二十八

卷之二十九

卷之三十

卷之三十一

卷之三十二

卷之三十三

卷之三十四

卷之三十五

卷之三十六

卷之三十七

卷之三十八

卷之三十九

卷之四十

卷之四十一

卷之四十二

卷之四十三

卷之四十四

卷之四十五

卷之四十六

卷之四十七

卷之四十八

卷之四十九

卷之五十

卷之五十一

卷之五十二

卷之五十三

卷之五十四

卷之五十五

卷之五十六

卷之五十七

卷之五十八

卷之五十九

卷之六十

卷之六十一

卷之六十二

卷之六十三

卷之六十四

卷之六十五

卷之六十六

卷之六十七

卷之六十八

卷之六十九

卷之七十

卷之七十一

卷之七十二

卷之七十三

卷之七十四

卷之七十五

卷之七十六

卷之七十七

卷之七十八

卷之七十九

卷之八十

卷之八十一

卷之八十二

卷之八十三

卷之八十四

卷之八十五

卷之八十六

卷之八十七

卷之八十八

卷之八十九

卷之九十

卷之九十一

卷之九十二

卷之九十三

卷之九十四

卷之九十五

卷之九十六

卷之九十七

卷之九十八

卷之九十九

卷之一百

卷之一百一

卷之一百二

卷之一百三

卷之一百四

卷之一百五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

卷之一百十三

卷之一百十四

卷之一百十五

卷之一百六

卷之一百七

卷之一百八

卷之一百九

卷之一百十

卷之一百十一

卷之一百十二

石索題人我担 送行語 朴翁啓事 密菴法語 蘭亭 血
 書法華經 桂溪頌軸 靈源大士讚芙蓉真跡 羣牧圖 柳公
 權真跡 諸尊宿語 陸放翁詩藁 江貫遠景橫幅
 卷之十六 題跋
 書呂吉甫莊子義後 書譚津集後 書林氏家譜後 書尤直院記
 事後 秋虫小卷 牧牛図 困 麻姑 松上鵠鵠 梅 葡萄 獅奴
 居岡 小米画 梁楷郭索 為松菴題過海心真 無文詩 敬書
 記頂相 送友詩軸 雜画 狩高僧偈後 曹仲庸悼頌後
 軸羅漢後 郭澹溪方外雲煙集 困高僧偈後 曹仲庸悼頌後
 尊宿帖 龍眠羅漢 二仏帖 净覺真跡 春山 大川墨
 跡 慈雲法師書 悼來首座頌卷後 宏智禪師真跡 祖父四
 世遺跡 送心知客出蜀頌軸 繩燈偈 張雪牕詩 四老墨跡
 敏藏主住庵頌軸 文會閣序 天台嚴教主帖 三尊宿序
 性命心情說後 東坡三適圖 草書心經 尊宿墨跡 悼斷
 橋頌冊 朴翁旧藁

住育王謝表 北磯老人住道場茶榜 常州感慈修觀音殿并兩廊
 古樵住慧日山門 老人住淨慈茶榜 平江慧日修造榜 紹興界
 嶺接待化田 径山火後再造榜 此閔崇果換柱塑天修殿 御書
 閣徑山再建大慧禪師塔 俊灑翁住庵江湖勸詩 武康翠峰彫裝西
 方三聖像翠峰 裝仏 琴僧雲竹卜築 広福仏殿 道場
 火後再造 五蒲仏殿 焙經榜 華亭東禪鐘樓 錢府庵茶榜
 會造亭 浄慈請無極諸山 凤山長慶鑄鐘 章府行者求僧
 陸榜 永隆院重修田岸 紹興九峰修造 武康瑞峯建接待
 又仏殿鐘樓僧堂 景山建水陸堂 菩提建法堂 浄慈行者求僧
 道場請 來石門薦母道場門榜 育王修上塔 天竺行者求僧
 重建 越城福果再建榜 六和塔造舍利閣榜 夏建楞嚴會
 濱山建三姑廟 本覺翻蓋衆屋 金牛寺化粥米
 卷之十九 疏

廬州地藏院造仏殿三門榜 老勤住廣福 華嚴水陸功德 城東
 宝積造法堂諸天閣 重刊大慧語錄 西林教院修造 靈隱重建
 仏殿兩 龍花修造 錢府菴行者求僧 北閔接待建喻弥陀祠
 道場請 華亭普照建殿 求僧 化炭 安溪橋千仏閣施茶湯榜
 結夏 双塔請山門 蓮社閣 福感寺建法堂閣 太虛住巾峯
 江湖 卜築 净慈再造莊屋 賢老化刊語錄 行堂歲修化香
 燭 焙經榜 上明風倒廊屋再建 古樵蔣山山門 保安院砌
 殿階 期餽榜 浄慈建正徧知閣 高麗請仏日山門 曹娥宝
 山塑仏 卓下接待 又鋤鐘造樓 下竺請閑雲湯榜
 堂榜 台州報恩造鐘樓仏殿 積善行者求僧 高麗修造

卷之二十 疏

大能仁造仏閣三門 天童請西嚴茶湯榜 甘露重建海門閣
 謝御書覽皇寶殿表 謝御書表 謝御書正徧知閣華嚴法界二扁
 二二九

雲化田　　偃翁住大平両　　四明隱學法華社鑄鍋　　姚江接待幹田
棲心建御書閣　　雪竇請西江諸山　　奉化半亭　　灌頂修殿塑
仏　　大慈行堂円覺会　　海無涯再住定水山門　　灌頂修殿塑
大慈建慈視殿　　軒都寺接待建閣　　天童再造　　塑仏俞良卿求
僧　　元大古住大平　　漠蕩接待化縁　　大慈行堂兀霄燈　　棲鳳

造橋　　松環峰住智門諸山　　延慶化縁　　天童造樓建藏鐘鑄
同少塗住延壽諸山　　離桐重造鐘樓　　勤慵衲住天台護國諸山
焙經榜　　偃翁住万寿諸山　　重建鄧橋　　得度堂元睿懺會榜
古靈叟住本覚諸山　　揖鉄船出世洪祐江湖　　育王修造榜　　伝枯
山住仗錫諸山　　姚江接待閣　　育王行化榜　　華亭北禪建殿榜
普照鐘樓榜　　虎丘修普門閣　　会元翁住隆教諸山　　横溪重建
化壇　　東吳經懺堂建殿造亭　　楞嚴會化香燭　　化城接待化田
応真修造　　寮前化帳席　　育王重造延壽院老宿寮空寂堂　　鳳山
建殿塑仏　　化開觀音籤　　大慈慈視殿上梁文　　大慈捺塗田発願
文　　保安

胡君墓誌銘　　塵外律師　　此山禪師　　太虛禪師　　無念禪師
頑空法師　　芝巖禪師　　栢庭僧錄　　仏日講師
卷二十四 行狀

北畠禪師　　石田禪師　　大川禪師　　笑翁和尚　　西巖和尚
淮海和尚

卷之二十五

謝史尚書　　荅胡學論　　孫給事　　吳履相　　賀史尚書　　馬觀
文　　陸宗丞　　史尚書　　張寺丞　　史端相　　孫粹　　答史承
奉　　答趙侍郎　　史資相　　崔都廂　　壽史大資　　厲制相
史明府　　史資相　　姚制使　　劉直院　　史資相　　陳尚書
陳帑院　　李制參　　史資相　　趙漕使　　壑翁相國　　李觀文
權便　　相國

* 本目録は内閣文庫所蔵の古活字版によつたが、本文と照合する
と、小見出し名の不一致はともかく、順序の異同や出入が若干
みられる。成竇堂文庫所蔵の宋版についても同様であるから、
未整理の状態がまだ踏襲されているものと思われる。

卷之二十二

西巖	剡源	鉄仏	中峰	閑雲	偃溪	雲峯	雪杭
姪	可宗師	淮海	無外	同源	如長老	祭本師	興
全都寺	謙知客	義侍者	遇兄	月窓	草堂	芳洲	

史秘閣	南康	齊韓國夫人林氏	張夫人	陸居士	考妣		
老礪先師		仏照師祖	受業先師	亮西山	賢一庵		
何山修円悟塔祭文		仏鑑禪師	古樵	石溪	棘林	南磯	
頑空							

西巖	剡源	鉄仏	中峰	閑雲	偃溪	雲峯	雪杭
姪	可宗師	淮海	無外	同源	如長老	祭本師	興
全都寺	謙知客	義侍者	遇兄	月窓	草堂	芳洲	